

# アシュモールとホラーによるガーター騎士団の記録

高野美千代

Ashmole, Hollar, and the Order of the Garter

TAKANO Michiyo

## Abstract

Elias Ashmole's *The Institution, Laws and Ceremonies of the Most Noble Order of the Garter* (1672), records the history and the traditional practices of the medieval Order of the Garter. This study attempts to analyse Ashmole's motive in writing this book, which is amply illustrated by prints by Wenceslaus Hollar. In writing the book, Ashmole fully exercised his knowledge and expertise as an antiquary and a herald, and Hollar's topographical, numismatic, and heraldic illustrations served as perfect accompaniments in fulfilling the author's aims. Ashmole not only succeeded in providing the readers with exact images of the Garter processions and the feast, to help them understand the rules and ceremonies of the Garter, but also in publishing a book which satisfied and pleased its readers, among whom would have been royalty. By looking at the relationship between text and image, this study concludes that the author, a renowned seventeenth-century antiquary and herald, was well aware of the importance of recording or recreating what was left of England's past and used Hollar's illustrations to reinforce his messages.

キーワード：イライアス・アシュモール、ウェンセスラウス・ホラー、ガーター騎士団、好古学  
key words: Elias Ashmole, Wenceslaus Hollar, the Order of the Garter, antiquarianism

## はじめに

1670年、チャールズⅡ世の側近であったアーリントン男爵ヘンリー・ベネット（Henry Bennet, first earl of Arlington, bap. 1618-1685）が、国王の代理として『ガーター騎士団』の出版を許可すると述べた辞から、この書物出版の背景の一端を知ることができる。<sup>1)</sup>それはまず、著者であるウィンザー紋章官イライアス・アシュモール（Elias Ashmole, 1617-92）が、過去15年にわたってガーター騎士団の歴史の調査研究を行ってきたこと、そしてその労苦の結果として、この書物が完成に至ったということである。この辞は1670年3月31日付となっているので、単純

に逆算すればアシュモールがガーター騎士団研究に着手したのは1655年頃となる。関連する膨大な資料を整理分析して700ページを超える大型フォリオ本に整えて出版の段階に至るまでに、アシュモールは長期にわたり作成に必要な経費の負担と研究時間の確保を行っていた。さらに、この辞では、今後15年は国内外において許可なくこの書物の複製を行うこと、挿画の模造を含め部分的な復刻などを取り扱うことを固く禁じている。

ガーター騎士団は14世紀にその起源を持つ由緒ある組織であって、英国の君主を中心とする騎士団である。ヨーロッパ諸国にも広くその名を馳せていたが、17世紀中期の革命期そして共和制

時代に入るとその存在自体が顧みられなくなった。本拠地のウィンザー城もかつてとは異なる様相を呈するようになった。アシュモールは関連する史料が消失する前に騎士団の歴史を残していかなければならないと考え、1655年頃には文献資料の収集を開始した。そして『ガーター騎士団』序文において、アシュモールは執筆の動機を次のように記している。

As I ever had a great veneration for the most Noble Order of the Garter, so must it needs be imagined, that I was accordingly much concerned, in the late unhappy times, to see the honor of it trampled on, and it self sunk into a very low esteem among us. That reflection put me upon thoughts, not only of doing something, that might inform the world of the Nobleness of this Institution, and the Glory which in process of time it acquired, both at home and abroad; but also of drawing up, in the nature of a Formulary, both the Legal and Ceremonial part thereof, for the better conduct of such, as might be therein afterwards concerned, in case the Eclipse, it then waded under in our Horizon, should prove of so long continuance, as that many occurrences, worthy of knowledge, might come to be in a manner forgotten.

アシュモールがガーター騎士団の研究を始めた1650年代半ば、ロイヤリストにとっては王政復古の夢はまだ遠いものであった。とくに革命期からの略奪や破壊行為によって、ウィンザー城、そしてガーター騎士団はその名誉が汚され、その伝統はもはや永久に滅びてしまう危険にさえ晒されていた。このことに、ロイヤリストであるアシュモールは強い危機感を覚えていた。アシュモールは、ガーター騎士団の威厳ある歴史と儀礼の詳細を自身の手で記録にとどめ、いつの日か騎士団が

復活するときに訪れた際に、必要とする人の便に供することを目的としてこの書物の執筆を決意した。この部分からはそういった意図を読み取ることができる。<sup>2)</sup> 騎士団の栄えある歴史を述べるにとどまらず、儀礼の詳細を記録したいという部分に注目するなら、アシュモールによるこの仕事は一種の「有職故実」研究とみなすことができよう。日本の有職故実研究のように、伝統を重んじ、継承することを目的に、儀礼や典礼の仔細を書きとどめたのである。

また、より正確で豊かな情報を著書によって後世に伝達するために、アシュモールは叙述に加え、版画という視覚的描写をふんだんに取り入れた。これは新たな試みとすることができる。すなわち、ガーター騎士団を扱う主な先駆的研究としては、ピーター・ヘイリンによる1631年出版の『聖ジョージの歴史』(Peter Heylyn [1599-1662], *History of St George*)、ジョン・セルデンによる1640年の『名誉ある称号』(John Selden [1584-1654], *Titles of Honor*)などがあって、アシュモールがこれらの文献を参照したことは『ガーター騎士団』本文欄外の注からも知ることができる。ただ、ヘイリンとセルデンの研究が叙述主体であるのに対して、アシュモールの『ガーター騎士団』にはウェンセスラウス・ホラー (Wenceslaus Hollar, 1607-77) による版画が実に約50枚挿入されている。それらは、紋章、メダル・コイン、ウィンザー城の風景、聖ジョージチャペル、騎士団の衣装や関連する道具、式典風景など多岐にわたる。当然のことながら、いずれも視覚的史料として提示されるべきとアシュモールが判断したものと考えることができる。本論考ではこれらの版画についても具体的に分析し、アシュモールとホラーが協働して制作した『ガーター騎士団』の制作・出版までの過程を検証し、書物史的背景を考察する。<sup>3)</sup>

### 好古学者としてのアシュモール

『ガーター騎士団』執筆の意図を探るためには、まずアシュモールの人物像の検討が必要となろう。イライアス・アシュモールは、1617年、イングランド中部のスタフォードシャーに生まれた。<sup>4)</sup> 1633

年、16歳の頃に、親戚のついででロンドンに出て、法律を学ぶことになった。1638年、20歳の頃には、法律家として職に就き、同じころ最初の結婚をしている。若いときからアシュモールはロイヤリストとしての思想を強く持っており、1644年には故郷スタフォードシャー、リッチフィールドの徴税官 (excise commissioner) に任ぜられ、その後、1645年にはオックスフォードで国王軍における重要職 (gentleman of ordnance in garrison) を得た。しかしオックスフォードでは、アシュモールはむしろ勉学にいそしんで時間を過ごし、オックスフォード大学ブレイズノーズカレッジで天文学の研究をするようになった。天文学者として著名な、王党派のジョージ・ウォートン (George Wharton, 1617-81) や当時は議会派側であったと思われるウィリアム・リリー (William Lily, 1602-81) との交友関係もこのころ築いている。そしてアシュモールはこの時期にオックスフォードにおいて多くのロイヤリストと交流し、人脈を広げることとなった。その後1649年には年上の女性資産家と2度目の結婚をした。円満な結婚生活とは言えないものだったが、この結婚をきっかけにアシュモールは金銭的に恵まれるようになり、必要なものを自由に購入して研究に没頭できるほか、他人を庇護するほどの余裕さえ生まれたという。

天文学そして錬金術の研究も行ったアシュモールであるが、好古学者としてその力量を発揮した最初の仕事は、1652年頃のものであった。アシュモールは、ロンドンのランベスに住むジョン・トラDESCANT親子 (John Tradescant, the elder, ?-1638; John, the younger, bap.1608-1662) の収集した珍品・骨とう品の分類に協力することとなったのである。トラDESCANTは、世界各地で植物を採集し、英国に持ち帰ったいわばプラントハンターとしても知られている。海外で様々な珍奇なアイテム (curiosities) を集めて、1630年代から自宅で公開していたという。トラDESCANTのコレクションは、「トラDESCANTの箱舟 (The Ark)」という名で知られており、収蔵物には生き物のはく製、貝や石、衣服、装飾品、コイ

ン・メダルなどが含まれていた。

アシュモールは、1652年、医師のトマス・ウォートン (Thomas Wharton, 1614-73) と共にトラDESCANTの収集物のカタログ化を始めた。カタログは、のちの1656年に『トラDESCANT博物館』 (*Musaeum Tradescantianum, or, A collection of rarities preserved at South-Lambeth near London*) として出版された。世界初の博物館カタログとも言われるこの本は、オクテーボ判で183ページに及ぶものとなった。そのうち、後半の約100ページには、造園家 (園芸家) として名を知られたトラDESCANTの、屋敷の敷地内の植物がリストアップされ掲載されている。このカタログの著者名はアシュモールではなく、ジョン・トラDESCANTとなっていて、アシュモールの名前はコレクションアイテムの寄贈者として2カ所で言及されるのみである。しかし、カタログの出版費用はアシュモールが負担していたこともあり、のちにトラDESCANTはアシュモールにコレクションの管理を委託することとなった。<sup>5)</sup>

1655年、アシュモールは好古学者のウィリアム・ダグデール (William Dugdale, 1605-86) と出会ったが、これがアシュモールの人生に大きな影響を与えることとなった。ダグデールは1650年代に好古学研究の書物を精力的に執筆していた。1655年はダグデールが『英国の修道院』 (*Monasticon Anglicanum*) 第1巻を出版した年でもある。文献や遺物などの史料を重視するというダグデールの実証主義的研究手法を目の当たりにして、アシュモールはそれを学び取ることになった。また、ウェンセスラウス・ホラーによる版画を挿絵に使い、書物に視覚的なインパクトを取り入れるという方法にも接して、影響を受けたことが考えられる。実際にアシュモールは1658年に出版されたダグデールの著書、『ロンドン聖ポール寺院の歴史』 (*The History of St. Paul's Cathedral in London*) のサブスクライバーとして、版画作成の費用を負担した。『聖ポール寺院の歴史』には、ホラーによる版画が挿絵として使用されていて、その作成費用を負担する協力者のほとんどがロイヤリストであった。王党派の願い

が具現されたかのように、ホラーの版画は、英国国教会を代表する聖ポール大聖堂の外観、内部のモニュメントや建築構造を詳細に描写するものであった。しかも、当時は既に聖堂が傷み、濫用されていたのだが、ホラーの版画は実際の悲惨な状態とは異なり、ロイヤリストが思い描く理想的な状態にある聖堂の姿を復元するものであった。そしてこの書物は、英国国教会のかつての繁栄が共和制国家において否定され、あるいは忘却の彼方へと追いやられる、という動きを阻止するような役割を担っている。アシュモールが制作費用を負担した版画は、聖ポールの聖堂中央の内陣の全体図である。かつて神を賛美する歌が響いたその場所も、当時は傷み、汚れていたはずであるのだが、この版画の中に人の気配はなく、美しいが無機質な感じのする描写となっている。<sup>6)</sup>

ダグデールとの出会いをきっかけに好古学研究にさらなる興味を持ったアシュモールは、同じ1655年頃、ガーター騎士団の研究を始めていたと考えられる。共和政時代に、あえて王国の歴史を象徴するような組織を支持し、その伝統を記録し、書物によって未来に伝えようと試みたのは、言うまでもなく好古学者らしい発想で、かつ好古学者としての使命を果たそうとするものあり、さらには窮地に追いやられていたロイヤリストとしての強い心情によるものであったとみなすことができる。ガーター騎士団の関連資料収集を開始したアシュモールは、39冊のフォリオ判ノートに情報をまとめていき、散逸した資料の調査には当時としては大金の500ポンドを費やした。史料を重視する研究アプローチはダグデール譲りであり、アシュモールは国内を回って教会に保管された記録文書を閲覧して、紋章や碑文を調査した。こうして、実践的に好古学の研究手法を身に付けていったようである。アシュモールは、紋章学だけでなく、貨幣学（ニューミズマティクス）の研究にも熱心であり、1658年、オックスフォードボドリアン図書館の館長トマス・バーロウ（Thomas Barlow, 1608/9-1691）の指示で、ボドリアン図書館に収蔵されているローマ時代のコインを研究するプロジェクトに着手した。実際、それ以前に

彼が扱ったトラデスカントのコレクションにも、多くのコインやメダルが含まれていた。つまり、アシュモールが貨幣学の知的権威であることは、1650年代には広く認知されていたと考えることができる。<sup>7)</sup>

共和政時代が終わりを迎え、1660年にチャールズ二世がフランスから英国に戻り、王位に就くと、アシュモールは表舞台に立つことになった。1660年、ロンドンの会計監査員に着任し、社会的に重要な職を得る一方、国王チャールズ二世所有のメダル・コインのカタログ作成も担当し、好古学者としての能力を発揮することにもなった。1662年には、散逸したチャールズ一世の宝物の調査プロジェクトに参画するなどし、王政復古のロンドンにおいてアシュモールはとくに国家儀礼の専門家として認知されるようになっていった。ガーター騎士団の復活を唱えたアシュモールは、ウィンザー紋章官に任命され、国王チャールズ二世の戴冠式の際には、格式を整えて伝統的な方法に則した儀式を執り行う任務にあたることになった。まさにアシュモールは「有職故実」研究の成果を発揮することになったのである。ジョン・オグルビー（John Ogilby, 1600-1676）による『ロンドンシティを通して戴冠式に向かう国王チャールズ二世のための祝賀』（*The entertainment of His Most Excellent Majestie Charles II, in his passage through the city of London to his coronation, 1662*）の巻末には、アシュモールが戴冠式の詳細を記録した「厳かな戴冠式についての簡潔な報告」（"A brief narrative of His Majesties solemn coronation"）約25ページが収録されている。王政復古後のアシュモールは、紋章官という身分を得て、聖ジョージの日の式典や国葬などへの列席や、地方を訪れて紋章の管理を行うなど、職務を果たしながら、好古学者としてガーター騎士団の研究を継続した。

さて、ここで『ガーター騎士団』出版にかかわった書籍商にも目を向けたいが、この書物は1670年に出版の許可を得て、1672年に出版された。出版者はナサニエル・ブルック（Nathaniel Brooke）で、アシュモールとは旧知の仲であっ

た。ブルックはロンドン書籍商として1646年から76年頃まで営業しており、アシュモールの著書では、1652年に出版された『英国錬金術文献集』(*Theatrum chemicum Britannicum*) や、1656年のトラデスカントの博物館カタログなど、過去に複数の作品を扱った経験があった。

『ガーター騎士団』の販売の記録は、1672年トリニティタームの「タームカタログ」に掲載されていて、1ポンド10シリングという、かなり高価な本として販売されたことがわかる。<sup>8)</sup> アシュモールと書籍商ブルックの関係は長く、ブルックはアシュモールのことをその財力を含めて熟知していたはずである。価格設定や印刷部数は二人が意見交換をして決定したものと考えられるが、ただし、ブルックは、例えば当時非常に高価であった紙の代金や印刷費用など、支払いはすべてアシュモールが済ませており、自分は書物取扱業者として名前を貸したにすぎず、この本に関する権利は一切主張しない、という誓約書にサインをしている。この書類は1673年3月29日付けのものであるが、その際にアシュモールは書籍の紙代として支払った51ポンド15シリング4ペンスの領収書をブルックから受け取っている。このことによって、アシュモール自身が費用を負担してこの本を制作したということが明らかになる。

さて、王政復古後、ダグデールとアシュモールのふたりは共に紋章官として活動することとなった。紋章官として、アシュモールはダグデールに同行して、地方の紋章の調査を行い、紋章の研究方法をアシュモールから直接学んだ。さらに、のちの1668年、妻を亡くしたアシュモールはダグデールの娘と3度目の結婚をし、彼らは親子の関係となった。そして、1672年に『ガーター騎士団』は出版された。アシュモールは1675年まで、ダグデールは亡くなる1686年まで紋章官を務めている。ダグデールとアシュモールの共通の知人であり、二人にとって好古学研究書を制作するのに最も重要な、むしろ不可欠な協力者が版画家のホラーであった。

## 版画家ホラーの経歴

ホラーは1607年にボヘミアのプラハで生まれた。ホラーの父親は、皇帝ルドルフII世から騎士に叙任され、紋章を授けられていた人物である。母方はさらに裕福な家系であった。ホラーの父親がカトリックの皇帝と親交があったブルジョア階級の官吏であったことから、一家はカトリック系であったと推測することも可能だ。しかし若き日のホラーの伝記的情報は十分に残っていると言えず、ホラーがプロテスタント信徒であったという見方もあるが、いずれをも裏付けるに足る情報はないと言わざるを得ない。<sup>9)</sup>

若き日の彼は親の意向に添わずに、芸術を好み、その道を歩むことを選択した。プラハを出たホラーは、1630年代、ヨーロッパ各地に足跡を残している。版画家としてのキャリアを考える際に特筆すべきことは、1631年、ホラーがドイツフランクフルトのメリアンの工房で修業をしていた可能性があることである。マテウス・メリアン(Matthäus Merian, 1593-1630)は17世紀を代表するヨーロッパ都市図・鳥瞰図の作成で有名な版画家であり出版者であった。二人の関係は定かではないのだが、マテウスの工房で制作された地図にホラーの手によるものが含まれていることから、何らかの形で関わりがあったことが推測される。したがって、その後ホラーがその名を世に知らしめることになった鳥瞰図の制作方法は、若き頃この工房で習得したと考えることが可能である。

そして1636年、英国の貴族であるアランデル伯トマス・ハワードと、ドイツのケルンにおいて出会ったことがホラーの人生の転機となった。アランデル卿は宮廷人であり有数の美術品収集家であって、ホラーの才能をすぐに見抜いた。アランデルに同伴してホラーはヨーロッパ各地で作品の制作を行い、同じ1636年の12月から、ロンドンのアランデルハウスで生活することになった。アランデルコレクションの絵画をもとに版画を制作するほか、王族や貴族の肖像画に取り組み、王子に絵画の手ほどきをするようになった。1640年代の作品については、得意のコスチュームプリントや昆虫や貝の版画が主なものとして挙げられ

る。そして、ホラー作品の中でもとくに傑作と言われるロンドンのパノラマ図や故郷アントワープの大聖堂などの作品をこの時期に制作している。革命の動乱期にはいったん英国を離れることになり、1644年頃までにはヨーロッパ大陸に戻っていたようである。そして1651年頃にホラーは再びロンドンに戻り、制作活動を始めた。本格的に書物の挿絵を手掛けるようになったのはこれ以降のことである。口絵部分の著者の肖像を扱ったものとは別に、1ページあるいは見開き2ページを使った大判の版画を挿入した本が、ホラーの作品によってこの時代から定着し始めた。1654年にはジョン・オグルビーによるウェルギリウスの作品集の挿画を手掛け、つづいて1655年にダグデールの『英国の修道院』第1巻、1656年にダグデールの『ウォリックシャの故事』、1661年に『英国の修道院』第2巻などがつぎつぎと発表された。『英国の修道院』は、英国各地にあった修道会の歴史をまとめたもので、ホラーの挿絵はおもに修道院を背景にたたずむ僧衣姿の修道士を描写したものであった。『ウォリックシャの故事』には、著者ダグデールの故郷であるウォリックシャの各地域の教会のモニュメントや有力一族の紋章などの版画が挿入された。そして、1658年の『聖ポール寺院の歴史』には、まさしくホラーの名人技と呼ぶべき微細な線画を施した作品が数多く含まれている。この書物に記録された中世の聖ポール寺院の建物は、1666年のロンドンの大火で失われてしまっているだけに、この書物はゴシック様式の聖ポール寺院の内と外を今日まで伝える貴重な資料となった。このようにホラーはたびたびダグデールからの仕事の依頼を受けており、アシュモールとダグデール、ホラーの3名は、1650年代なかばから交流を持つようになった。アシュモールの日記によると、1659年の5月にはホラーを伴ってウィンザーに行っていたことが記録されているので、その頃すでにホラーはガーター騎士団の本拠地であるウィンザー城周辺のデッサンをしていたと考えることができる。

ホラーは好古学者による著作の挿絵を晩年まで制作していた。彼の生家は裕福であり、1640

年代アントワープで過ごしたころには版画家として一世を風靡して、英国においては王族貴族とも近い関係にあった。しかもホラーは非常に勤勉な人物であり、生涯の間に、3千点以上の作品を制作したことが記録されている。ところが、実際に金銭的にはあまり恵まれず、晩年も決して楽な暮らしができたわけではなく、齢70に近づいてもなお制作活動を続けた。ホラー最後の作品は好古学者ロバート・サラトン (Robert Thoroton, 1623-78)の『ノッティンガムシャの故事』(Antiquities of Nottinghamshire, 1677)、および好古学者で紋章官のフランシス・サンドフォード (Francis Sandford, 1630-94)の『イングランド国王と英国君主の系譜』(A Genealogical History of the Kings of England and Monarchs of Great Britain, 1677)の挿画となった。ホラーがロンドンでの活動を再開した後は彼の晩年に至るまで、17世紀好古学者が挿画家としてのホラーに強く依存していたことがわかる。

### 『ガーター騎士団』における記録

アシュモールがガーター騎士団の研究を始めた時点、すなわち1655年頃、王政復古の兆しは遠く、ロイヤリストにとっては先行きを見通せない時期であった。ロイヤリストの象徴とでもいうべきガーター騎士団とその本拠地であるウィンザー城は、議会派軍による略奪や破壊行為によって、その名誉が汚され、悲惨な状態にあった。喪失の危機に瀕し、アシュモールは、その威厳ある歴史と儀礼の詳細を自身の手で記録にとどめ、いつの日か騎士団の復活に資することを目的として、執筆を決意した。このことは、すでに述べたように、著書『ガーター騎士団』の序文に記されている。

さて、ガーター騎士団とは、14世紀(1348年)に創設された英国一古い騎士団である。その名称の由来として伝えられているエピソードで、一般によく知られているのは次のような内容である。エドワード三世(在位1327-77年)が舞踏会でダンスをしていた際に、相手の女性がガーターを落とすというハプニングに見舞われた。人前で女性がガーターすなわち靴下止めを落とすことは、

至って恥ずべきこととみなされていた当時、しかも国王とダンスをする女性がガーターを落としたので、それを見た周囲の者が女性を嘲笑した。すると、国王はガーターを拾って自身の足に巻き付け、「悪意のある者に災いあれ (Honi soi qui mal y pense)」と言ったというものだ。これは騎士団のモットーとなっている言葉である。ただしこれが騎士団の名前の由来であるかどうか確証はない。そもそもエドワード三世は、ブリテン王国の宮廷文化を象徴するようなアーサー王伝説の円卓の騎士団、騎士道の精神に動かされてこの組織を作ったと言われている。26人の騎士が構成する組織である。守護聖人は聖ジョージであり、毎年4月23日、聖ジョージの祭日に集会が催される。1344年には円卓の騎士団を設置したいという意思を表明していたエドワード三世であったが、正式にガーター騎士団が設立されたのは1348年8月とみなされている。

このように、歴史ある騎士団を記録して後世に伝えるという目的で、アシュモールは私財をなげうって、ガーター騎士団の調査を始めた。そして、55点の版画をホラーに制作させて、まれに見る美しい書物を作り上げることに成功した。ここでは、ホラーの版画を研究したペニンントンのカタログを参考に作品の分類を考えていきたい。『ガーター騎士団』に収められたホラーによる55点の内訳は、見開き2ページの大型の版画が15点、1ページの版画22点、その他は1ページの中の一部だけの小さな版画である。ペニンントンによるカテゴリーで作品を分類すると、最も多いのが紋章・貨幣・式典用具で、合計27点ある。見開きの1点を除けば、それらはほとんど小さな挿絵で、ページの一部を飾るものとなっている。メダルやコインの版画はおそらく実物に近く作られているためか、とくにサイズが小さい傾向がある。ウィンザー城の外観を含む風景・建築・眺望のカテゴリーに入る作品は11点であるが、これらには見開きの版画が多く、しかもホラーの卓越した技術が明瞭に表れている。ガーター勲を歴史的に記録する目的が顕著に表れたと考えられる挿絵は主に式典用具、貨幣等であり、一方で書物としての審美的

価値や芸術性を追求して収められたのが建築や風景の版画であったと考えることができる。さらに、式典の行列や騎士の紋章を描いた版画は、書物自体の評価と反響に直接的な影響を与えたと考えることができよう。

版画55点をペニンントンによる分類番号の順で分類すると、神話が1点、歴史(ガーター騎士団)が7点、地図・景観が11点、紋章・貨幣・装飾類が35点(うち紋章15、貨幣15、装飾類5)、その他(イニシャル文字)が1点となる。紋章・貨幣・装飾類が最も多くなっているが、中でも貨幣(コイン・メダル)の版画の多さが目に付く。貨幣学の研究が、当時関心を持たれていたことがわかる。また、地図・景観図はホラーのまさに得意とするところで、本の価値を高めることに直結したと言える。ガーター騎士団の歴史にまつわる版画や装飾類は、未来に向けて騎士団の存在を伝えていこうというアシュモールの気持ちが強く表れたものと言える。

ピーター・ヘイリンとジョン・セルデンによる、ガーター騎士団の先駆的研究書が叙述主体であるのに対して、アシュモールの『ガーター騎士団』には大型の版画を含む多くの挿画が含まれている。それらは、紋章、メダル・コイン、ウィンザー城の風景、聖ジョージチャペル、騎士団の衣装や関連する道具、式典風景などである。これらは、執筆の時点で将来に向けた保存が危惧されたものである。つまり、これらが視覚的史料として後世のために記録すべきであるものと判断されたのは確かであろう。ただし、それとは別の意図として、アシュモールは版画を挿入することにより、本の価値を高めたいという考えも持っていた。『ガーター騎士団』第4章では「言葉による説明が読者の想像力に与えるものよりも、さらに大きな喜びと満足を読者の目に与えるために、この壮麗で堂々たる建造物の姿と展望を正確に描いた版画を数枚挿入する」とアシュモール自身が書いている。書物は読み手に情報を提供するだけでなく、喜びや満足を与えるものだとアシュモールは考えていたのだろう。

この本に収められたホラーの版画作品として

最もよく知られているのは、ウィンザー城と聖ジョージチャペルを描いた11点と言うことができるかもしれない。3枚がウィンザー城外観、残りが聖ジョージチャペル外観および内部の構造を伝えるものである。ダグデールの『聖ポール寺院の歴史』や『ウォリックシャの故事』(*Antiquities of Warwickshire*, 1656)において、ホラーの版画は言葉だけで十分に伝えきれない建築や風景の独特な雰囲気、微細な線による遠近、明暗の表現によって、見事に表現して、書物のテキスト部分の理解をさらに深める補助的な役割を果たした。アシュモールの『ガーター騎士団』においても同様に、これら11枚に代表されるホラーの風景版画は、特に好古学研究の成果を広め、さらに書物の芸術的な価値を高める効果を発揮している。

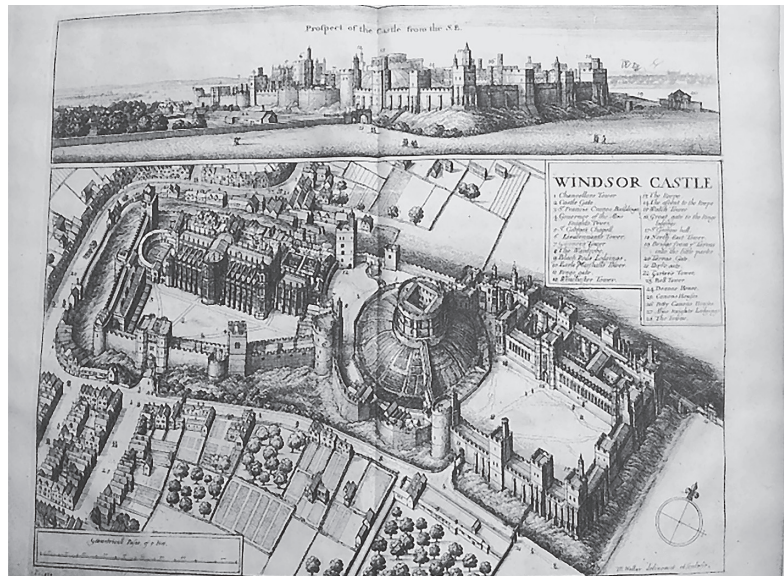
ペニントンが付けた番号の順に、版画を分類して考察したい。『ガーター騎士団』の第3章までは騎士団の歴史、諸外国の騎士団の概要などが主な内容となっていて、ウィンザー城聖ジョージチャペルを本拠地とするガーター騎士団を中心に扱うのは第4章以降である。まず、ガーター騎士団の歴史に関連する版画では、聖ジョージの日に行われる式典の様子が描かれた版画が中心となっている。式典の日のプロセッションすなわち行列の版画が2枚あるが、ひとつは女王エリザベスI世による1576年ガーター騎士団の式典の行列を表したものである。ただしこれは別の人物によって下絵が制作されていたものを、ホラーが彫刻したという作品である。この行列最後部には、明らかにエリザベス女王と判断できるような風貌で女王陛下の姿が描かれている。25名の騎士たちにはそれぞれ頭上に紋章が描かれているので、人物の特定が可能となっている。もう一枚の式典の行列の版画は、1671年、国王チャールズII世と騎士団のものである。これには、紋章官としてアシュモール自身も参加していて、版画にも当人とわかるような角度で顔の部分が描かれている。また、国王もその特徴のある風貌がありありと描かれている。この版画に関しては、出版直前の式典を扱うものであるため、その当時の王族貴族紋章官などの姿が描写されている。そのため、これには現

代の記念写真のような意味も含まれているのではないだろうか。この版画にその姿を取められた人たちは、国王も含めて、上梓された『ガーター騎士団』を手にするようになった。アシュモールからの献本という形が多かったのであるが、その返礼としてアシュモールは金品を得るというケースが珍しくなかった。国内外の貴族王族をはじめとする読者の間でこの書物は大変評判がよく、献本の謝礼或いは褒美として、著者アシュモールに金品が送られたのである。このようにして、アシュモールは出版にかかった経費の一部を取り戻すこととなった。

有職故実研究という観点からは、式典の日の祝賀会、宴会の様子を描いた版画に注目したい。宴会の会場となる聖ジョージホールでは、奥(上座)のほうに国王と王妃の姿が従者と共にあり、ホール左側の壁を背に騎士たちが座っているのが見て取れる。この版画からは、祝賀会における席の配置、食事の配置、配膳の様子、見物人など、宴会の詳細を知ることができる。もうひとつの有職故実研究的な要素として、騎士の装束を描いた版画が特に注目し得る。見開き2ページにわたる版画で、ホラーが得意とするコスチュームプリントの一種である。騎士団の名前の由来ともなっているガーターは、装飾の貴石の位置や個数などが詳細に示されている。頸飾には聖ジョージの飾り像が付いているが、版画では拡大されたものがあわせて示されている。大綬(ribbon)には小型の聖ジョージ像が付いているのがわかる。マントのひだや光沢そして質感はホラーならではの繊細なタッチで描かれ、重量感までも表現されている。マントは君主がまとうものと騎士用とが異なるため、2枚がそれぞれ描かれている。羽根つきの帽子も装束の一部であるが、ホラーの卓越した技術が2色の羽根の描写にも表れている。

つぎに、地図・景観に分類されたトポグラフィ作品についてだが、際立って目を引くものはホラーの最大傑作の一つと言われるウィンザー城の鳥瞰図である。実物写真と比べたら異なる部分は多少あるものの、ホラーが彼自身のたぐいまれな才能を十分に発揮して制作したこの鳥瞰図は、芸





ウィンザー城鳥瞰図

術的な出来栄えとなっている。また、ウィンザー城全体をとらえた版画は他にも複数あり、あらゆる方位から眺めたパノラマ3枚を縦に配列したものは、ホラーがテムズ川南岸からロンドンの街を描写した、当時大変人気を博したロンドンパノラマ図にも似たものである。これとは別にウィンザー城の情景を描いた版画があるが、こちらは川の対岸から向こう側の丘の上に見える城を描いたものである。周囲には船が浮き、船上には人の姿も見受けられる。城の手前には民家も並び、ホラーの風景画としては、有機的な、親しみやすい雰囲気醸成している。

『ガーター騎士団』では、エドワード三世の時代からのガーター騎士の氏名と紋章を、476点掲載しており、これらは実に10ページに及ぶ。当時の騎士たちはもちろん、国王に仕えてきた先祖を持つロイヤリストたちにとっては大変誇らしい記録として受け止められたに違いない。14世紀の創設期から、この本が出版された1672年までに叙任された騎士までが記録されている。17世紀、英国において紋章への興味はかなり深まっていたことが推測される。それは、たとえばジョン・ガイリム(John Guillim, 1550-1621)による、紋章学の書物が17世紀の間に繰り返し再版されたという事実によって証明されている。ガイリムの著書『紋章図案集』(*Display of Heraldry*)は

初版が1610年であるが、1679年には第5版までが出され、さらに18世紀になってもその人気は続いていた。当時、書物が再版されるのは当たり前のことではなく、同じ17世紀の間に5版まで出版されるのはあくまでも稀であり、その書籍の人気の高さを裏付けるものと言える。たとえば日記作家のサミュエル・ピープス(Samuel Pepys, 1633-1703)は、1667年9月6日、ガイリムの『紋章図案集』を妻のために購入したと日記に書いている。ガイリムの例もそうであるが、紋章学を扱う類の書物には、たびたび紋章の挿絵が含まれていた。したがって、10ページを費やして476もの紋章を示すというアシュモールの判断は、当時の人々の紋章への関心の強さから見ても、理にかなったものと考えることができる。

つぎに、メダル・コインの版画を見てみたい。メダルやコインの研究すなわち貨幣学は、アシュモールがかなり得意としていたことで、すでに述べた通り、彼はこの才能を活用してトラデスカントのコレクションのリスト作成やボドリアン図書館の収藏品ひいては国王チャールズ二世が所有するコレクションの鑑定を行っていた。ジョン・イーブリン(John Evelyn, 1620-1706)は、『ニューミズマータ』(*Numismata*)という貨幣学研究の本を書いているが、そこで貨幣は「古代を語る遺物(Vocal Monuments of Antiquity)」と言っている

る。メダルやコインによって過去を知るという方法が有効であることはヨーロッパ大陸諸国ではすでに認知されていたが、英国では貨幣学の研究は比較的小く取っており、アシュモールが第一人者とみなされていたと言ってよいかもしれない。『ガーター騎士団』第1章で扱われるローマのコインは、国王チャールズII世のコレクションにあるものだった。アシュモールは、騎士団という組織の起源に関連する「徳 (virtue)」と「誉 (honor)」が刻まれたコインを挿絵入りで紹介している。ローマ時代、「徳」と「誉」という人間の特性は、神格化されるほど重視されるものであった。それを裏付けるものとして、9種のコインを挙げている。たとえば、ひとつの例では「誉」は若人で、ローレルの冠をかぶり長髪巻き髪をしている。「徳」は武具の兜をかぶっているが、「誉」と重なっているため顔はほぼ隠れている。「誉」が「徳」よりも前面に描かれているのは、名誉ある人には内側に美徳があると考えられていたからである。このようにアシュモールは、騎士団の精神の根底にあるものが、徳と誉であるということを、古いコインに描かれた図像を用いて証明したのである。

このように、アシュモールはガーター騎士団の歴史、騎士団のしきたりや制度を長年にわたる資料調査によって詳述したのであるが、より確実に後世に情報を伝達するために、挿画という視覚的描写を取り入れた。それはホラーの得意とするトポグラフィやコスチュームの版画であり、また、アシュモールが研究する貨幣学、有職故実、紋章学を扱う版画であった。

## むすび

アシュモールといえば、オックスフォード大学のアシュモリアンミュージアムでその名が現在も残る人物であるが、一方のウェンセスラウス・ホラーは、日本国内ではほとんど認知されていない芸術家である。しかしホラーは17世紀ロンドンにおいては王室や貴族から目をかけられ、ヨーロッパ大陸においても、芸術愛好家の間で大変よく知られた版画家であった。この二人の協働に

よって『ガーター騎士団』が完成したのである。

アシュモールとホラーが知り合った17世紀半ばのロンドンには動乱期であり、王党派と議会派の対立、内戦、国王の処刑、そして清教徒が支配する共和制国家の時代となっていたのである。アシュモールは生粋の王党派であったし、ホラーも1630年代にロンドンに移住してから王党派のサークルにおいて活動をしていたため、1650年代において彼らは決して喜ばしいとは言えない状況に置かれていた。王族貴族はかつての権力・財力を失い、英国国教会も機能せず、それどころか衰退の一途をたどっており、先行きの見えない時代であった。王室や国教会の建築の破壊や濫用、宝物の略奪、古文書の喪失など、英国の伝統的な価値の継承は危機的な状態にあった。ロイヤリストたちにとっては、いま、その記録を残さなければ、王室を中心に繁栄したかつての英国の姿が永久に失われてしまうという切迫した状況となっていた。これが主な動機となって、アシュモールはウィンザー城を本拠とするガーター騎士団の調査を開始することになった。そして長い年月をかけてその成果を一冊の本にまとめ、王政復古後の1672年に出版するに至ったのである。それが、大型のフォリオ判で700ページを超える大作となった。しかもこの本は、歴史をまとめた叙述中心の本ではなく、ホラーの版画によって、歴史的な意義に加えて芸術性と感傷的価値を持つ壮麗なフォリオとして、国内外の王族、貴族に受容されるものとして完成を見たのである。

アシュモールは、文献資料に丁寧にあたり、ガーター騎士団に関する規約や儀礼について、調査を行い、この書物を出版するに至った。そしてその際に、より正確な情報を後世に伝達するために、アシュモールは叙述のみならず、版画という視覚的描写をふんだんに取り入れたのである。具体的には、紋章、メダル・コイン、ウィンザー城の風景、聖ジョージチャペル、騎士団の衣装や関連する道具、式典風景など、著者アシュモールが、とくに視覚的史料としても保存されるべきと判断したものである。くわえて、何度となくアシュモールは、「読者を満足させるために、これら（たとえばウィ

ンザーの風景や記念のメダルなど)の版画を作らせたので、挿絵をご覧いただきたい」といったことを書いており、この本が、読み手にとって喜ばしいものとなることを大いに意識して制作されたことがうかがえる。好古学者であり紋章官であるアシュモールならではの緻密な研究の成果がこの書物の中には存分に表されており、版画家ホラーの力添えを得て、英国の伝統的宮廷文化の一端を広く知らしめることに成功している。実際に、国内外の王族貴族をはじめとする読者にこの書物は高く評価されたのであるが、具体的な受容に関しては改めて論ずる機会を持ちたい。

### 〔謝辞〕

本研究はJSPS 科研費 17H02317, 19K21631 の助成を受けたものです。

### 注

- 1) ベネットは1670年の時点では男爵であったが、1672年に伯爵となり、ガーター騎士にも叙任されている。『ガーター騎士団』の原題は、*The Institution, Laws & Ceremonies of the Most Noble Order of the Garter* (『高貴なるガーター勲の設立、規定、儀礼』)であり、本稿では『ガーター騎士団』と題名を略して示す。なお、「騎士団」と訳している英語の "order" であるが、この言葉には「階級」や「地位」という意味も含まれている。ベネットの辞は『ガーター騎士団』冒頭部分に挿入されている。
- 2) これは好古学者に共通する発想であり、たとえば同時代のジョン・オーブリー (John Aubrey, 1626-1697) も同様の思いに駆られて好古学研究を進めた。オーブリーはホラーと面識があり、短いものであるがホラーの伝記を残した人物である。
- 3) アシュモールと版画家ホラーの関係を中心に扱う研究は未だなされていない。断片的な考察の例としては、リチャード・ベニンソン (Richard Pennington) の *Descriptive Catalogue of Wenceslaus Hollar Who Drew London 1607-1677* (Cambridge UP, 1982) 序論を挙げることができる。
- 4) アシュモールの伝記的情報は主につぎの文献に依拠する。C. H. Josten, ed. *Elias Ashmole: His Autobiographical and Historical Notes, his Correspondence, and Other Contemporary Sources Relating to his Life and Work*, 5 vols. (Oxford UP, 1966) .
- 5) このコレクションがオックスフォード大学アシュモリアン博物館に保管されるものとなった。アシュモールは、1670年代にトラデスカント家から引き継いだ古物・骨董品類を保管する目的で、オックスフォード大学と交渉し、アシュモリアン博物館が建設されることになった。建物は、1679年から4年ほどかけて1683年に完成した。ただしこれは現在のアシュモリアン博物館ではなく、今では科学史博物館 (History of Science Museum) として使用されている建築物である。
- 6) ダグデールの『聖ポール』に表れるロイヤリストの心情に関する考察は、Graham Parry and Michiyo Takano, "The illustrations to Dugdale's *History of St Paul's Cathedral*: Subscribers and their Sentiments". *The Seventeenth Century*. 2020. 35. 4. 473-495を参照されたい。
- 7) 貨幣学 (numismatics) は当時の博識家には人気であった。アシュモールは、トラデスカントのカタログを作成する時点で、すでに貨幣学の知識を備えていたと考えることができよう。
- 8) 「タームカタログ」は、1668年から1709年頃まで年4回ロンドンで発行されていた書籍目録で、新刊書などの詳細 (タイトル・著者・概要・価格など) が掲載

されていた。

- 9) ホラーの伝記的情報はおもにつきの資料による。  
Pennington, "The Life of Hollar," *Descriptive Catalogue of Wenceslaus Hollar* (Cambridge, 1982)  
および Robert J. D. Harding, "Hollar, Wenceslaus (1607-1677), etcher." *Oxford Dictionary of National Biography*. 23. Oxford University Press.  
Date of access 29 Oct. 2021,  
<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-13549>